

アイニーの2年代記の 執筆手順とその史料価値 ——『イクド・アル＝ジュマーン』 第17巻前半部の出典分析——

中 町 信 孝

は じ め に

チェルケス・マムルーク朝時代 (784-923/1382-1517) エジプトのハナフィー派大法官バドルッディーン・アル＝アイニー Badr al-din Maḥmūd b. Aḥmad al-‘Ayni (762-855/1360-1451)⁽¹⁾は、2つの年代記『イクド・アル＝ジュマーン *‘Iqd al-jumān fi ta’riḥh ahl al-zamān* (以下、*‘Iqd* と略す)』と『ターリーフ・アル＝バドル *Ta’riḥh al-badr fi awṣāf ahl al-‘aṣr* (以下、*Badr* と略す)』の作者として知られている。

このうちアイニーの「大歴史書」として知られる *‘Iqd* は、天地創造から849/1446年までを扱った大部の年代記であり、その豊富な情報量からマムルーク朝時代史のもっとも重要な史料の1つと見なされている。しかし、写本残存状況の複雑さゆえに未だ十分な史料研究がなされておらず、大部分が未刊行のまま残されているため、マムルーク朝研究者によって十全に利用されているとは言い難い。一方、「小歴史書」として知られる *Badr* は、*‘Iqd* の要約版であると見なされることが多く、全く校訂がなされていないばかりか、未だにその全体像も明らかにされていない。

筆者はすでに、現在 *‘Iqd* として伝来する数点の写本の内容を比較し、これらの中に *‘Iqd*、*Badr* およびそれぞれの抜粋・要約版という4種のテキストが混在していることを指摘した。さらに、現存する *‘Iqd* のテキストには、746/1345年から798/1396年にかけての記述が欠落していることを明らかにし、その欠落を補うためにも、*Badr* をも含めたアイニーの諸年代記の総合的な分析が必要である

ことを指摘している⁽²⁾。

このような問題点を踏まえ、本稿ではアイニの2著作 *ʿIqd* と *Badr* がどのような関係にあるのかを解明することを第1の目的とし、さらにそれぞれの史料価値を検討したい。その手段としては、まず双方のテキストを比較して伝える内容の異同を調査し、次に他の年代記史料と比較してそれぞれの情報の出典を分析する。本稿は、アイニの2年代記の全貌を明らかにする手がかりを提供するとともに、マムルーク朝時代を代表する歴史家であるアイニがどのようなプロセスで歴史書を執筆したかという、一つの事例を提示することにもなる。

第1章 史料説明

ʿIqd は、そもそも全19巻からなる年代記として構成されたが、そのうち現在までで校訂・出版がなされているのは、第14巻の後半から第15巻にかけてと、第19巻の後半のみであり、近年これらに加えて第12巻の後半の校訂本が出版されている⁽³⁾。

本稿では、*ʿIqd* 第17巻の前半部分に相当する、725/1324年から735/1335年の記述を扱う。この年代は、アイニが生きた時代から1世紀ほど先立つものの、後述するユースフィー al-Yūsufī の散逸した年代記をはじめ、バフリー・マムルーク朝時代 (648-784/1250-1382) の同時代史料からの引用部分が数多く見受けられ、史料価値は極めて高いと考えられるからである。また、対象を限定するために、各年の死亡記事 (wafayāt) の検討は割愛した。

本稿で使用する写本と刊本は、以下のとおりである。

1 *ʿIqd* 写本

(i) Ahmet III 2911/a17 (以下、*ʿIqd/A*) : トプカプサライ (Topkapı Sarayı Müzesi Kütüphanesi) 所蔵。葉数187葉、サイズ275mm×180mm、1頁あたり行数31行、書体ナスフ体。著者の直筆原稿と考えられる。全19巻本のうちの第17巻であり、725/1324年から745/1344年までの記述を収載するが、今回扱うのはその前半部分 (fols.

1v-98r) のみである。

執筆年等の情報は記載されていないが、他の *'Iqd* 直筆本のシリーズから推測が可能である。著者直筆本のうち、第1巻から第13巻に関しては825年ムハッラム月/1421年12月-1422年1月から832年ムハッラム月/1428年10-11月の間に執筆されたことが分かっており、また最終巻である第19巻は851/1447-48年との日付が入っている⁽⁴⁾。したがって、アイニーが1巻から順に執筆していったとの前提に立つならば、本稿で扱う第17巻は、832/1428年から851/1447-48年の間に執筆されたと考えて良いだろう。

今回はカイロのアラブ連盟写本研究所 (Ma'had al-Makhṭūṭāt al-'Arabiyya) にあるマイクロフィルムからの複写を利用したが、数葉に1葉、インクののにじみらしきしみによってほとんど判読不可能となっている葉が見られる⁽⁵⁾。

(ii) Süleymaniye 835 (以下、*'Iqd/S*) : スレイマニエ図書館 (Süleymaniye Kütüphanesi) 所蔵。256葉、275mm×180mm、19行、ナスフ体。'Abd Allāh b. 'Īsā b. Ismā'il al-Azhari なる人物によって、マムルーク朝時代末期に書写されたと考えられる⁽⁶⁾。全19巻本のそれぞれを2分冊としたシリーズの、第33巻目に相当し、725/1324年から735/1335年までの記述を収載する。内容は *'Iqd/A* にほぼ一致するが、細かな表現で異なる部分もある。

なお、本稿では *'Iqd/A* を底本として用い、*'Iqd/S* で補うこととする。出典を示す際には [*'Iqd*, 11r (22r)] のように、*'Iqd/A* の葉数を先に挙げ、*'Iqd/S* の葉数をその後に () に入れて記す。

2 *Badr* 写本

(i) Süleymaniye 830 (以下、*Badr/S*) : スレイマニエ図書館所蔵。217葉、253mm×163mm、31行、ナスフ体。著者アイニーの兄弟である Aḥmad al-'Aynī (al-'Ayntābī) (d. 834/1430) により書写された写本。717/1317年から798/1396年の記述を収載し、本稿では fols. 16r-35v の部分を扱う。従来、*'Iqd* 写本の一つと見なされてきたが、収載内容や表紙に見られる情報は、*Badr* の第9巻にあた

る写本であることを示している。さらに本写本の最終葉には、本文と同じ筆跡で、「*Badr* の歴史 (*al-Ta'riḥ al-Badrī*) の第 9 巻が、書写者 (*kātibī-hi*) Aḥmad b. Aḥmad b. Mūsā b. ... al-'Ayntābī... の手によって、813 年サファル月 1 日 (1410 年 6 月 4 日) の土曜日に終わる。」[*Badr/S*, fol. 217r] との奥付がある。すなわちこの奥付情報からは、この写本の書写年が 813/1410 年であることが明らかになる⁽⁷⁾。必然的に、*Badr* の初稿が執筆されたのは 813/1410 年を遡ると見なされる。

(ii) BL, Add. 22360 (以下、*Badr/B*) : 大英図書館所蔵。192 葉、264mm×168mm、31 行、ナスフ体。書写年代、書写者は未詳。717-798/1317-96 年の記述を収載し、本稿では fols. 16r-33v の部分を扱う。内容の上で、上述の *Badr/S* とほとんど一致する。

なお、本稿では *Badr/S* を底本として用い、*Badr/B* で補う。出典を示す際には [*Badr*, 11r (22r)] のように、*Badr/S* の葉数を先に挙げ、*Badr/B* の葉数をその後に () に入れて記す。

3 その他

その他の刊行史料の書誌と略称は、以下のとおりである。

Bidāya: Ibn Kathīr, *al-Bidāya wa-l-nihāya fī ta'riḥ*, vol. 14, Cairo, 1932.

Ḥawādith: Al-Jazarī, *Ta'riḥ ḥawādith al-zamān wa-anbā'i-hi wa-wafayāt al-akābir wa-l-a'yān min abnā'i-hi*, vol. 2, ed. 'Umar 'Abd al-Salām Tadmuri, Ṣaydā & Beirut, 1998.

'Iqd/Amin: Al-'Aynī, *'Iqd al-jumān fī ta'riḥ ahl al-zamān*, ed. Muḥammad Muḥammad Amin, vols. 1-4, Cairo, 1987-92.

'Iqd/Qarmūṭ: ……., ed. 'Abd al-Rāziq al-Taṭṭāwī al-Qarmūṭ, 2 vols., Cairo, 1985-1989.

'Iqd/Rizq: ……., ed. Maḥmūd Rizq Maḥmūd, Cairo, 2002

Kashf: Ḥājji Khalifa, *Kashf al-ẓunūn 'an asāmi al-kutub wa-l-funūn*, 2 vols., Istanbul, 1941-43.

Nihāya: Al-Nuwayrī, *Nihāyat al-arab fī funūn al-adab*, vol. 33,

ed. Muṣṭafā Ḥijāzī, Cairo, 1996.

Nuzha: Al-Yūsufī, *Nuzhat al-nāẓir fī sirat al-Malik al-Nāṣir*, ed. Aḥmad Ḥuṭayṭ, Beirut, 1986.

東
洋
学
報

第2章 ‘Iqd、Badr の記述の相違

‘Iqd と Badr それぞれのテキストの比較検討に移る。

第1節 ‘Iqd、Badr の記述の特徴

まず、‘Iqd、Badr 双方の記述の共通点を見ると、どちらもヒジュラ暦の1年単位で構成され、各年の記述の冒頭には「...年に起こった出来事に関する章 (faṣl fī-mā waqa‘a min al-ḥawāḍith fī al-sana ...)」との見出しが付されている。各年の記述が、事件記事 (ḥawāḍith) と死亡記事の2つから成り立っている点も共通している⁽⁸⁾。

一方相違点としては、‘Iqd の記述が、「官位や役職を与えられた者の話 (dhikr man un‘ima ‘alay-hi bi-l-waẓīfa aw al-imra)」 「使者などでエジプトへやって来た者の話 (dhikr man qadima ilā Miṣr min al-rusul wa-ghayr-him)」 というような「話 (dhikr)」単位で整理されているのに対し、Badr ではそのような単位区分はなく、ほぼ事件の生起順に記述されるため、両者における情報の記載順序は著しく異なる⁽⁹⁾。また ‘Iqd では情報の典拠を示す “wa-qāla...” (～曰く) という表現を頻用するが、Badr ではそのような表現は一カ所に見られるのみである⁽¹⁰⁾。

‘Iqd中に記された典拠情報を元に、各年の記述を分類したのが【表1】である⁽¹¹⁾。‘Iqd の該当部分には、全部で383段落があるが、そのうち “qāla...” などの形で典拠が明記されている段落は118あり、全体の3割弱を占める。残る265段落には典拠が明記されていない。しかし、チェルケス期の歴史家であるアイニーが、バフリー期に属する当該年代の事件を記述するためには、必然的に彼に先立つ何らかの情報源を持つはずである。したがって、アイニーの実際の引用箇所は、この数を大きく上回ると考えねばならない。

‘Iqd 中に典拠としてあげられた史料は、以下の通りである。

第
八
十
六
卷

五
九
六

【表1】 'Iqd, Badr における典拠ごとの段落数

	725年	726年	727年	728年	729年	730年	731年	732年	733年	734年	735年	計
qāla ṣāhib al-Nuḥḥa/al-rāwī	8	5	7	16	10	6	6	3	3	7	6	77
'Iqd のみの記述	8	5	7	16	10	6	6	3	3	7	6	77
Badr にもある記述	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
qāla Ibn Kaṭhīr	3	6	3	7	2	4	5	1	0	1	3	35
'Iqd のみの記述	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1
Badr にもある記述	3	6	3	7	2	4	5	1	0	1	2	34
qāla ba'q al-mu'arrikhīn	1	0	0	0	0	1	1	1	0	0	1	5
'Iqd のみの記述	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	5
Badr にもある記述	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
qāla al-Nuwayī	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1
'Iqd のみの記述	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
Badr にもある記述	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1
その他、引用元注記無し	35	18	26	30	18	21	33	20	25	17	22	265
'Iqd のみの記述	31	11	11	20	5	9	13	12	17	13	15	157
Badr にもある記述	4	7	15	10	13	12	20	8	8	4	7	108
計	47	29	36	53	30	32	46	25	28	25	32	383
'Iqd のみの記述	40	16	18	36	15	16	20	16	20	20	23	240
Badr にもある記述	7	13	18	17	15	16	26	9	8	5	9	143
Badr のみの記述	5	2	4	5	0	4	2	1	1	1	0	25

Iqd 中の記述

まず最も言及されることが多い典拠は、「*Nuzha* の作者 (ṣāhib al-*Nuzha*)」と呼ばれる人物である。この人物は、『*Iqd* 中では単に「伝達者 (al-rāwī)」とも呼ばれているが、どちらの場合もバフリー期の歴史家であるユースフィーを指している⁽¹²⁾。対象とする『*Iqd*』の11年分の記述からは、このユースフィーを典拠とする段落は、77件確認できた。本稿ではこのユースフィーを典拠とする記述を、「Y情報」と呼ぶこととする。

次に多い典拠は、イブン・カシール Ibn Kathir であり、『*Iqd* 中で彼に帰せられた段落は35件ある。本稿では彼に帰せられた記述を「K情報」と呼ぶ。さらに「ある歴史家 (書) (ba‘d al-mu‘arrikhīn/al-tawārikh)」に帰せられている段落が5件、ヌワイリー al-Nuwayrī に帰せられている段落が1件ある。

先述の通りアイニーは、すべての引用箇所で典拠を明示しているわけではない。しかしとりあえずは、この期間におけるアイニーの主な情報源は、ユースフィーとイブン・カシールの2者である、と見なして良いだろう⁽¹³⁾。

次に *Badr* の記述を見てみたい。対象期間の *Badr* の段落数は、『*Iqd* と重複するものが143段落、*Badr* のみに見られるものが25段落で、計168段落ある。段落数のみを比較すれば、*Badr* は『*Iqd*』の約43.9%となる。このような分量の違いから、従来 *Badr* は『*Iqd*』の単なる要約 (mukhtaṣar) であると見なされてきた⁽¹⁴⁾。しかし先に見たとおり、両作品の執筆年の推定から、*Badr* が『*Iqd*』よりも先に書かれたことがうかがえるため、前者が後者の要約版であるという可能性は薄い。また、*Badr* 固有の情報が存在することや、後で見るとおり『*Iqd*』よりも *Badr* の方が正確な情報を伝えている段落も確認できることから、内容面での検討によっても *Badr* が要約ではないことは明らかである⁽¹⁵⁾。

なお、両書の本文中で「私は言う (qultu または aqūlu)」との形で記された箇所が、『*Iqd*』に3件、*Badr* に1件確認できる⁽¹⁶⁾。そのうち『*Iqd*』の2件は、それぞれの直前の記述にある人名の遺漏を補う短い文章である。残る『*Iqd*』の1件は *Badr* の1件と共通する内容

であり、アイニーの父 Shihāb al-dīn Aḥmad がその父 Sharaf al-dīn Mūsā から聞き取った情報を伝えている。いずれの場合も、個々の事件に関するアイニー自身の見解や評価を記したのではない。

第2節 典拠ごとの比較：Y情報とK情報

【表1】に挙げたとおり、『Iqd』中のY情報77段落のうち、『Badr』にも記載されている段落は皆無である。一方のK情報は、『Iqd』中に35段落あるうち、『Badr』にも記載されている段落は34件であり、『Iqd』のみが有する情報はわずか1件である。このように、Y情報とK情報とは、その伝えられ方に際違った相違があることが分かる。

『Iqd』中には、一つの事件に関してY情報とK情報とを併記してい

【表2】 『Iqd』でY情報とK情報を併記する箇所

	年(AH)	見出し	『Iqd』	『Badr』
1	725年	イエメン遠征軍の出発	5r(10r-10v)	16r-16v(16r)
2	726年	イブン・タイミーヤ裁判	22r-22v(50r-51r)	18r-18v(17v-18r)
3	〃	スルターンによる息子のカラク派遣	22v(51r-51v)	17v-18r(17r-17v)
4	〃	Jūbān によるメッカへの引水	22v-23r(51v-53v)	18r(17v)
5	〃	Abū Saʿīd の元から Aytamish の帰還	22v-24r(53v-55r)	17v(17r)
6	727年	アレッポ総督 Alṭunbughā と Sayf al-dīn Arghūn のダマスカス到着、その地での会合	29r-29v(68v-69v)	19v(18v)
7	〃	使者などのカイロへの到着	93r(73r-73v)	20v21r(19v-20r)
8	〃	アレキサンドリアで起こった反乱	31v-32r(75r-77r)	20v(19v)
9	728年	第一段、Jūbān に関すること	36v(88r-89r)	22r(21r)
10	〃	第二段、Jūān の殺害	36v-37v(89r-91v)	22r(21r)
11	〃	第四段、Tamurtāh の逮捕と殺害	39v(96v-97v)	22r(21r)
12	729年	役職とイクターを与えられた者と、罷免・解雇された者	46v(116r-116v)	25r-25v(24r)
13	730年	総督、使者等でエジプトに至った者	52v(130v-131v)	26r(24v-25r)
14	〃	狩猟中のスルターンの転落	54r(134v-135v)	26r(25r)
15	〃	Aldamur amī jandār の殺害	54v-55r(137r-138v)	27r-27v(25v-26r)
16	731年	使者で至った者	58?(151r-151v)	28v(27r)
17	〃	メッカへの軍隊派遣	60r-60v(156v-158r)	29r(27r-27v)
18	〃	その他の出来事	61v (159v-160r)	29r(27v)
19	734年	アミール位と役職を与えられた者と、罷免された者	82v?(217v)	33r(32r)
20	735年	執行吏と会計で捕縛された者	92r(241r-244v)	35r(33r)
21	〃	牢獄から釈放された者	93v(244v-245v)	35r(33r)

る箇所が21カ所ある。その詳細は【表2】のとおりである。これらの箇所においてアイニーは、はじめに「イブン・カシール曰く」と断ってある情報を引用し、次に「*Nuzha* の作者曰く」と断って同じ事件に関する異聞を引用している⁽¹⁷⁾。その一例として、【表2】の3の例を引用しよう。

【史料1-①】[*Iqd*, 22v (51r-51v)]

「イブン・カシール曰く (qāla Ibn Kathīr)、^(a)726年シャアバーン月7日金曜日の夜の日没時 (waqt al-maghrib)、スルターンは、^(b)当時およそ8歳になる ('umr-hu yawma'idh naḥw thamān sinīn) 息子の Aḥmad を、カラクへと向かわせた (wajjaha)^(c) Qijlis が彼への奉仕のために出発し (tawajjaha fī khidmat-hi)、^(d)彼とともに Tuqtamur al-Khazindār に付き添わせて (ṣuḥba) 金庫 (khizānat māl) を送り出した (sayyara)^(e) 彼らは明くる年 (al-sana al-ātiya) のジュマードーⅡ月2日火曜日にカイロに帰還した。

伝達者曰く (qāla al-rāwī)、その当時のカラク総督は Sayf al-din Bahādur であった。スルターンは彼に宛てて、金をカラクの支出のために充てること、息子にその金を使わせぬことを書き送った。そして息子にも同様に忠告した。彼の意図するところは、息子がその地で諸事を学び、善行と狩猟とに専心することであった。また彼は、彼が密かに行うことの蓄えとなるようにして、彼に金を送った。彼らはカラクに到着すると、スルターンの息子をその地に残し、カイロへと帰還した。」

この例では、スルターンの王子である Aḥmad がカラクへ送られた事件が描写されている。まずK情報では、(a) 事件の日付、(b) 当時の王子の年齢、(c)(d) 王子に同行した2アミールの名前、(e) 彼らの帰還の日付といった情報が挙げられている。ついでY情報では、スルターンからカラク総督への命令という、K情報にない叙述でこの事件の描写を補っている。このように、Y情報とK情報が併記されている箇所では、2つの系統の記述が補完的に用いられており、特に、簡潔に事件のあらましを描写するK情報に対

し、Y情報はより長い文章で事件の詳細を述べるというパターンが多い。

'Iqd のこのような記述に対して、Badr でも該当する記述を見つけることができる。それが【表2】の「Badr」の列に示した部分である。Badr における記述を 'Iqd と比較すると、'Iqd がY情報とK情報とを併記しているのに対し、Badr ではK情報に当たる部分のみが記されている。そして 'Iqd のK情報とBadr とを比べると、両テキストが著しく似通っていることが確認できる。例として、【史料1-①】のK情報に対応する Badr の記述を挙げる。

【史料1-②】[Badr, 17v-18r (17r-17v)]

「この年、^(a)その月の7日金曜日の夜の日没時 (waqt al-maghrib)、スルターンは、^(b)当時およそ8歳になる (sana yawma'idh naḥw thamān sinīn) 息子の Aḥmad を、カラクへと向かわせた (wajjaha)^(c)Qijlis が彼への奉仕のために出発し (tawajjaha fī khidmat-hi)、^(d)彼とともに Tuqtamur al-Khazindār に付き添わせて (ṣuḥba) 金庫 (khizānat māl) を送り出した (sayyara)^(e)彼らはジュマダーⅡ月2日火曜日にカイロに帰還した。」

この記述を 'Iqd と比較すると、「イブン・カシル曰く」という文言は 'Iqd にしかない点、王子出発の年・月が記されていない点、'Iqd では「彼ら」の帰還が「明くる年」と明記されているが、Badr にはそのような限定はないという点、以上の3点に違いがある。しかし、その他の部分では、上に述べた (a) ~ (e) の情報を伝えており、両者の記述は細かな表現に至るまではほぼ同じであることが分かる。そして、'Iqd、Badr の記述におけるこのような特徴、すなわち、'Iqd におけるY情報とK情報の補完的性格、および、'Iqd のK情報と Badr との類似は、【表2】に挙げたすべての例で確認できる。

第3節 典拠ごとの比較：「ある歴史家」からの情報

また 'Iqd には、K情報と「ある歴史家」に帰せられた情報とが併記される箇所もある。以下に取り上げるのは、725年にカイロ北

郊の Siryāqūs に建てられた道場(khānqāh)での任命式の記述である。ここではまず K 情報が挙げられ、次に「ある歴史家曰く」として新たな情報が挙げられている。ここでもやはり K 情報は、*Badr* での該当箇所とはほぼ同じ表現をとっている。まずは *'Iqd* の K 情報と *Badr* の記述とを引用する。両テキストを比較してその異同を明確にするために、引用は一つの文章で行い、*'Iqd* に固有の記述を []、*Badr* に固有の記述を () で示した。

【史料 2-①】 [*'Iqd*, 15v (34v); *Badr*, 16v (16v)]

「[イブン・カシール曰く、]_(a)この年 [すなわち725年] Siryāqūs の Samāsīm に宮殿と道場が建造された (*'ummira*)_(b)そこで ジュマダー II 月 9 日木曜日に任命式が開かれ (*ḥaṣala al-julūs*)、スルターンは法官や学者、諸ザーウィヤの長老たちや彼らの元にいる貧者たちの列席を命じ (*rasama... bi-ḥuḍūr*)、大規模な宴席を開いた (*maddū simāṭan 'aẓīmatan*)_(c)そして、大長老 (*shaykh al-shuyūkh*) として 'Alā' al-dīn al-Qūnawī に、その道場の長老 (*shaykh al-khānqāh al-madhkur*) として Majd al-dīn al-Aqṣarā'i に賜衣を授与した (*khala'a*)_(d)そこには40人のスーフィー (*ṣūfī*) を配置し (*rattaba*)、彼らすべてに (毎月) 40ディルハム、毎日 3 ラトルのパンを支給した (*rattaba*)。その後スーフィーの数を増やし (*thumma zāda ba'da dhālika 'adad/'ala 'iddat al-ṣūfiyya*)、100人のスーフィーを置いた。」

以上の引用にある情報は、(a) 宮殿と道場の完成、(b) 任命式の開催、(c)、長老らの任命、(d) スーフィーの配置とその条件、の4点にまとめられる。両テキストの記述を細かく比較すると、*'Iqd* 冒頭に「イブン・カシール曰く」と書かれている点、および *'Iqd* には「この年」が具体的に725年であることが述べられている点に相違が見られる。しかし、その内容はどちらも上述の4点を含んでおり、表現もほとんど一致することが分かる。そしてこのような記述の後、*'Iqd* では次の文章が続く。

【史料 2-②】 [*'Iqd*, 15v (34v)]

「ある歴史家 (ba‘d al-mu‘arrikhīn) 曰く、この年、Siryāqūs の諸宮殿と道場の建設が完成した。スルターンはそこに赴き宴会 (walīma) を催した (‘amila) が、そこには法官や貴顕、スーフィーの長老たちが出席した。^(e)そしてスルターンは、大法官 Badr al-dīn b. Jamā‘a の面前で (‘alā)、彼の “tusā‘iyyāt” の中から20のハディースが、その息子である法官の ‘Izz al-dīn ‘Abd al-‘Aziz によって朗読される (bi-qirā‘a) のを聴講した (sami‘a)。(以下略)」

ここでの記述は、【2-①】と同じく宮殿と道場が完成した際のことを叙述しているが、その内容は【2-①】の内容を補完するものとなっており、特に (e) スルターンによる “tusā‘iyyāt” なるハディースの聴講という情報はここで初めて伝えられている。そして上述の通り、この「ある歴史家」に帰せられる情報は、*Badr* では対応箇所を見いだすことはできないのである。

第4節 ヌワイリーからの情報

‘*Iqd* においてヌワイリーからの引用と明記された段落は、ヒジュラ暦731年に一カ所あるのみである。この箇所は *Badr* にも共有されており、さらに *Badr* 中でも「ヌワイリー曰く」との表現が用いられている。以下に、‘*Iqd* と *Badr* 双方で該当する記述を引用する。ここでも引用は一度に行い、‘*Iqd* 固有の記述を []、*Badr* 固有の記述を () で示す。

【史料3-①】[‘*Iqd*, 61r (158v); *Badr*, 28r (26v)]

「ヌワイリー曰く (wa-qāla al-Nuwayrī)、サファル月9日水曜日、Sājūr 川がアレppoに達した。その地の総督、(前述の Sayf al-dīn) Arghūn と [彼に従う (ma‘a-hu)] アミールたちが徒歩で (mushātan) それを迎えに (li-liqā’-hi) 出かけた。彼らの旗は、神の偉大さ (al-takbīr) と、神の [恩寵 (al-tahmīd)] (栄光 (al-tamjīd))、神の唯一性 (al-tahlīl) を記したものだだった。歌い手たち (al-mughannīn) や楽士たち (al-muṭribīn) で、彼らに付き従う者は誰もいなかった。総督の帰還の際 (‘inda

rujū'), 病が彼を襲い (ḥaṣala la-hu maraḍ), それがもとでこの年彼は亡くなったというのは、後で述べるとおりである。

このように、両者の記述は微妙な表現の違いにとどまっており、内容については冒頭の「ヌワイリー曰く」という表現も含め、ほとんど一致している。先述の通り、*Badr* の事件記事中で、出典を明示している箇所はここ以外にはなく、それだけにアイニーにとってのヌワイリーの重要性が示唆されよう。このことについては次章で考察する。

第3章 先行史料との比較：アイニーの出典分析

次に、*Iqd* および *Badr* のテキストと、これらに先行する諸年代記との比較を行い、アイニーの出典を分析する。まず *Iqd* 中に典拠としての言及があるユースフィー、イブン・カシール、ヌワイリーを検討し、その後それら以外の著者による年代記を取り上げる。

第1節 ユースフィー

ユースフィー (759/1357-58年没)⁽¹⁸⁾ が著した年代記 *Nuzha* は、先に見たとおり、当該時代の *Iqd* においてもっとも引用されることの多い史料である。*Nuzha* は、バフリー期、特にナースイル・ムハンマド治世に関する最重要史料の一つとされるが、現在その大半が散逸しており、ヒジュラ暦733年から738年に至るまでの記述のみが現存する。

Nuzha 現存部分と *Iqd* との関係については、すでに、Little と Ḥuṭayṭ による詳細な分析がある。Little の行った調査では、*Iqd* の735年の記述に「*Nuzha* の作者曰く」と明記されている箇所は6カ所あるが、*Nuzha* の写本とテキスト比較した結果、実際には *Iqd* 中での *Nuzha* からの引用は22カ所に及ぶことが明らかとなっている⁽¹⁹⁾。また、*Nuzha* 写本の校訂テキストを出版した Ḥuṭayṭ は、その刊本の前書きで733年から738年の記述を *Nuzha* と *Iqd* で比較している。それによると、アイニーは6年分の記述において、47カ

所で *Nuzha* との出典を明記しており、さらに実際に引用した段落 (*mawḍū'a*) は126カ所である⁽²⁰⁾。

本稿においても、*Iqd* と *Nuzha* とを比較したところ、*Iqd* の733年から735年の事件記事部分の記述において、Y情報と明記された16の段落すべてについて、*Nuzha* での引用元と思われる箇所を確認することができた⁽²¹⁾。さらに、*Iqd* 中には典拠情報が無いが、明らかに *Nuzha* が典拠となっている部分が、21カ所見つけた⁽²²⁾。典拠が明示されているY情報16カ所については、それらが *Badr* とは全く共有されていないことは、すでに【表1】に挙げたとおりである。では、典拠明示のない21カ所についてはどうであろうか。*Badr* での対応箇所を探したところ、それらに対応するものは一件も見つからなかった。以上より、少なくとも733年から735年の記述に関する限り、*Badr* にはY情報は一切含まれていないことになる。そして、このことは散逸した732年以前の記述にも当てはまるだろう。

このように、典拠を明示することなく *Nuzha* から引用した箇所も含めると、733年から735年の間にY情報は37段落存在し、この3ヶ年の *Iqd* の事件記事全体 (85段落) の43.5%、*Iqd* のみにある記述 (63段落) の58.7%を占める。第2章第2節で述べたとおり、Y情報の記述はおおむね長く詳細であるため、段落数ではなく文章量を比較するなら、Y情報の占める割合はこれらの数字をさらに上回ることになる。

第2節 イブン・カシール

イブン・カシール (774/1373年没)⁽²³⁾は、*Iqd* においてユースフィーに次ぐ主要な情報源とされている。それでは、アイニはイブン・カシールのいかなる年代記を参照したのだろうか。

オスマン朝の文献事典 *Kashf* の *Badr* の項目では、アイニが「事件 (*al-ḥawāḍith*) の引用において、イブン・カシールの *al-Bidāya wa-l-nihāya* に依存した」[*Kashf*, i, 287]と指摘されている。このことから、アイニが「イブン・カシール曰く」と記す

とき、それがイブン・カシールの最も有名な年代記である *Bidāya* のことを指すと考えるのが自然だろう。

ところが、現在刊行されている *Bidāya* の記述は、当該時代についての記述がきわめて少なく、*ʿIqd* のK情報の引用元はほとんど確認できない⁽²⁴⁾。例として、先に挙げた【史料2】に対する、*Bidāya* での対応部分を見てみたい。

【史料2-③】 [*Bidāya*, xiv, 122]

「ジュマードーⅡ月の初旬、スルターンは自らが建造した Siryāqūs の道場を開き、そこに運河 (khalīj) を通して (saqā) 街区 (maḥalla) を建設した。スルターンはそこに、法官や貴顕、アミールたちなどを伴って出席し、Majd al-din al-Aqṣarāʾi を任命した。スルターンはそこで大きな宴会 (walīma) を催し (ʿamila)、大法官 Ibn Jamāʿa の面前で (ʿalā) 20のハディースがその息子 ʿIzz al-din によって朗読される (bi-qirāʾa) のを聴講した (samiʿa)。」

この記述と、上述の【史料2-①、②】とを比較すれば、その違いは明らかであろう。*Bidāya* の記述は、Majd al-din al-Aqṣarāʾi の任命を伝える点では *ʿIqd* のK情報と共通しているが、ハディース聴講を伝える点で「ある歴史家」に帰せられる記述と共通している。しかし、それぞれの記述はあまりにも簡略であり、いずれにしても *Bidāya* がアイニの情報源となったとは考えられないのである。

Bidāya に関しては現在出ている校訂本ではほぼテキストが確定されており、管見の限りこれと異なるバージョンの写本の存在は知られていない。それでは、*Bidāya* 以外にイブン・カシールによる歴史書が存在したのだろうか。H. Laoustによると、イブン・カシールは *Kitāb al-takmil* なる歴史書も執筆していたことが知られているが、その内容は、初期の伝承学者に関する記述が中心となっていたとのことである⁽²⁵⁾。したがってこの *Kitāb al-takmil* が、本稿の対象とする年代に関して *Bidāya* 以上に詳細な記述を含んでいるとは考えにくい。

以上、*Iqd* 中の K 情報が、現存するイブン・カシールの著作の中にはその引用元を求めることはできないということを確認した。この問題については第 4 章で再び考察する。

第 3 節 ヌワイリー

【史料 3-①】で見たとおり、本稿が扱う範囲内でアイニーが出典を「ヌワイリー」と明示しているのは、731年の情報一つのみであり、その情報は *Iqd*、*Badr* でほぼ共有されている。それでは、アイニーが「ヌワイリー曰く」と言うとき、どの歴史書のことを指しているのだろうか。

ヌワイリー (733/1333年没)⁽²⁶⁾ の百科事典 *Nihāya* は、その後半部分が天地創造に始まる人類史になっており、バフリー期に関する一次史料としての価値は高い。*Nihāya* 以外にヌワイリーによる歴史書の存在は知られていないため、アイニーが参照していたのはこの *Nihāya* であったとまず考えるのが妥当であろう。しかし、*Nihāya* の刊本の最終巻である vol.33は730年で記述が終わっており、アイニーが引用する731年の情報の典拠となった部分を確認することはできない。

ここで、ヌワイリーが実際には何年の記述までを書き残していたのが問題となる。M. Chapoutot-Remadi は、「彼の年代記は彼の死の2年前である731/1331年に終わっている」とするが、その根拠を示してはいない。一方、*Nihāya* の刊本は前述の通り730年で記述を終えているものの、その最終頁には、731年の記述に続くとの文言がある⁽²⁷⁾。これを踏まえて *Nihāya* の校訂者は、ヌワイリーが730年以降の記述も執筆していたとの可能性を示している⁽²⁸⁾。

したがって、*Nihāya* には現行の刊本以降の内容を含む続編が存在し、アイニーが【史料 3-①】の情報をそこから引用したという可能性は十分に考え得るが、それを立証するにはさらなる *Nihāya* の写本調査が必要となろう。本稿ではむしろ次のように、*Nihāya* の現行の刊本と *Iqd*、*Badr* とを比較することによって、ヌワイリーがアイニーにとって特別な重要性を有する史料であったことを指摘

【表3】728年の記述における3史料の対応関係

<i>Nihāya</i>	<i>Badr</i>	<i>'Iqd</i>	<i>Nihāya</i>	<i>Badr</i>	<i>'Iqd</i>
1			23	15	5
2	1	1	24	16	35
3			25		
4	2	9	26		
5	4	11	27		
6	5	13	28		
7	6	14	29	17	36
8	7	15	30	18	48,49
9	8, 9	18,19	31		
10	10	22	32		
11	11	23	33		
12	11		34		
13	11		35		
14	12	9	36		
15	13	28	37	19	37
16	13		38	19	37
17			39	20	38
18			40		
19			41		
20	14		42		
21			43		
22			44		

※表中の数字は、各史料の段落番号。*Nihāya* の段落番号は、*Nihāya*, xxxi, 249-271における校訂者による形式段落の区分けに基づく。*Badr* と *'Iqd* の段落番号は、中町「バフリー」 pp. 157-160, 表8に基づく。

したい。

3 テキストを比較してまず目立つのは、情報の掲載順序について、*Nihāya* と *Badr* とが類似している点である。【表3】は、ヒジュラ暦728年の記述にかんして、*Nihāya* 中の各情報に対応する *Badr*、*'Iqd* の段落番号を並べたものである。この表を見て分かるとおり、*Nihāya* と *Badr* はほぼ同じ順序で情報を掲載しており、*'Iqd* ではそのような類似は見られない。なお、このような傾向は、本稿が対象とする725年以降、*Nihāya* の刊本が含む730年までの各年の記述

において、共通して観察される。

もっとも、このような記載順序の類似は、*Nihāya* と *Badr* が基本的に事件の生起順にしたがって情報を記載しているためとも言える。*Iqd* に関しては第1章で述べたとおり、“dhikr” 単位で記述されているため、他の2者と記載順序が異なっているのである。

ただし、*Badr* においても一部、事件の生起順からは逸脱するような順序で記載されている記事が存在する。たとえば728年の記述で例を取ると、*Badr*, 23v (22v) には、728年ジュマダーⅡ月19日/1328年4月30日にダマスクスで法学者イブン・タイミーヤ Ibn Taymiyya が拘禁された事件が記されているが(段落19)、この記事の直前は、ズルヒッジャ月8日/1328年10月13日にアミールたちが釈放された事件が記されており(段落18)、ここでは明らかに生起順の原則から逸脱している。しかし、これに対応する *Nihāya* の記述を見てみると、このイブン・タイミーヤ拘禁事件は、「この年ダマスクスで新たになったことの話 (dhikr mutajaddidāt kānat bi-Dimashq fī hādhihi al-sana)」との見出しを付されて、その年の事件記事の末尾に記載されていることが確認できる⁽²⁹⁾。このようにして、*Nihāya* と *Badr* との情報記載順の類似性は保たれているのである。

記述内容を比較すると、*Badr* や *Iqd* に比べ、*Nihāya* が圧倒的に詳細な内容を有している箇所は多い。例として、先に見た【史料1】に対する *Nihāya* での対応部分を見てみよう。なお、*Iqd*、*Badr* と共通する記述には下線を付した。

【史料1－③】 [*Nihāya*, xxxiii, 200]

「ジュマダーⅠ月の6日木曜日になると、スルターンは、^(b)
当時およそ8歳になる (sana yawma'idh naḥw thamān sinīn)
 一番上の息子 (walad-hi al-akbar) の al-amir Aḥmad を送り出す (khurūj) 決意を固めて、昼の初め頃、山の城塞から Siryāqūs の諸宮殿へと向かった。そして^(a)その月の7日金曜日の夜の日没時 (waqt al-maghrib)、彼は山の城塞から出発した。^(c)彼をカラクへと送り届けるために、amir silāḥ の Sayf

al-din Qijlis al-Nāṣri が、彼への奉仕のために出発した (tawajjaha fī khidmat-hi)。また、私に伝えられたところによると、^(a)スルターンは彼に金庫 (khizānat al-māl) を携行させ、アミールの Sayf al-din Tuqtamur al-Khazindār に付き添わせて (ṣuḥba) それを送り出した。彼らはカラクへと向かい、そこに到着し、スルターンの息子をそこに落ち着かせると、^(e)アミールの Sayf al-din Qijlis が帰還した。彼の山の城塞への到着は、先述の年 (al-sana al-madhkūra) のジュマーダー II 月 2 日火曜日だった。」

下線部から分かるのとおり、*Nihāya* の記述の分量は、*‘Iqd*、*Badr* のそれをはるかにしのいでいる。しかし、*‘Iqd*、*Badr* 中にある (a) Aḥmad 出発の日付、(b) Aḥmad の年齢、(c) (d) 随行したアミール 2 名の名前、(e) 彼らの帰還の日付などの情報は、*Nihāya* 中にすべて含まれており、また「当時およそ 8 歳になる」「日没時」「彼への奉仕のために出発した」などの細かな表現もほぼ共通している。なお、*Nihāya* と *‘Iqd* の間には、Aḥmad 出発の日付等で相違が見られるが、それについては次章で詳しく検討する。

さらに、【史料 2】の対応部分を見てみたい。

【史料 2－④】 [*Nihāya*, xxxiii, 181]

「^(a)この年、Siryāqūs のそばの (qurb min) Samāsīm の地における、ナースイリーヤ宮殿と道場の建造が完了した (kamulat ‘imārat)。^(b)そこでジュマーダー II 月 9 日木曜日に任命式が開かれ (ḥaṣala al-julūs)、スルターンは大法官や学者、カイロとフスタートおよび両カラーファにある諸ザーウィヤと諸道場と諸リバートのすべての長老たちや彼らの元にいる貧者たちの列席を命じ (rasama... bi-ḥuḍūr)、スルターンと副スルターン、国家の大アミールたちが出席し、彼らがその道場に集まり、美味なる料理と焼き物、甘味、飲み物をともなった多くの宴席が開かれた (wa-maddat al-asmiṭa)。^(c)そして、大長老 (shaykh al-shuyūkh) として ‘Alā’ al-din al-Qūnawī に、その道場の長老 (shaykh al-khānqāh al-madhkūr) として Majd al-din al-

Aqṣarā'i に、およびこの両名以外の者に、賜衣を授与し (khala'a)、諸道場、諸ザーウィヤ、諸リバートの貧者たちに金銀を振る舞い、記念すべき日となった。^{o(d)}スルターンはその道場に40人のスーフイーを配置し (rattaba)、彼らに有り余る物を与えた。彼らすべてに毎月40ディルハム、毎日3ラトルのパンを支給し (rattaba)、恒常的な宴席を用意したのである。 (...略...) その後スーフイーの数を増やし (thumma zā ba'ad dhālika 'iddat al-ṣūfiyya)、100人のスーフイーを置いた。 (...略...)」

ここでもまた、*Nihāya* が *'Iqd*、*Badr* を振かに上回る豊富な情報を有することは明らかであろう。また、引用文中に (a) ~ (d) の記号で示したとおり、【史料2-①】における情報 (a) ~ (d) はすべて *Nihāya* も共有しており、*'Iqd* と *Badr* の記述が *Nihāya* の内容を超えることはない。そして、「任命式が開かれ」「列席を命じ」「その後スーフイーの数を増やし」などの表現においても非常に類似している。

本節で明らかになったことをまとめると、以下の通りである。第1に、*Nihāya* と *Badr* の情報掲載の順序は著しく似通っている。第2に、*Nihāya* の記述は *'Iqd*、*Badr* をはるかに上回る分量を持つ。第3に、*'Iqd*、*Badr* の表現は *Nihāya* に含まれている。以上の特徴をもってただちに *Nihāya* が、アイニの直接の情報源であると断定することはできないが、少なくともそれに近い内容を持つ史料であると推測される⁽³⁰⁾。

第4節 ジャザリーとビルザーリー

ジャザリー al-Jazarī (739/1338年没)⁽³¹⁾ の著した年代記 *Ḥawādith* と、*'Iqd*、*Badr* との間には、情報の共通性は少ない。しかし、*'Iqd* 中で「ある歴史家曰く」と紹介される記述の中には、*Ḥawādith* の記述と共通するものも見られる。例えば、【史料2】に対応する *Ḥawādith* 中の記述は、以下のとおりである。

【史料2-⑤】 [*Ḥawādith*, ii, 72]

「ジュマードー第2月9日木曜、スーフィーたちや両都市の長老たち、大法官たち(qaḍā'(sic.) al-quḍāt) や一部の貴顕が出席した。スルターンはその地の道場であって、大法官 Badr al-din b. Jama'a の面前で ('alā)、彼の tusā'īyyāt の中から20のハディースが、その息子である 'Izz al-din 'Abd al-'Aziz によって朗読される (bi-qirā'a) のを聴講した (sami'a)。」

このように、*Ḥawādith* ではイブン・ジャマーアの息子による“tusā'īyyāt”の朗読が伝えられているが、これは *Iqd* の【史料2-②】における情報(e)とほぼ一致する。ここから、ジャザリーの記述が *Iqd* では「ある歴史家」として引用されている可能性が見て取れよう。ただし、「ある歴史家」については引用箇所が少なく、その典拠を特定することは難しい。

また、ジャザリーの記述の中には、先に見た【史料3-①】と非常によく似た表現も見られる。以下に、*Ḥawādith* における該当箇所を挙げるが、双方で表現の共通する部分には下線を付した。

【史料3-②】 [*Ḥawādith*, ii, 454-455]

「ビルザーリーの直筆稿から書き写す (naqaltu min khaṭṭ al-ḥāfiẓ 'Alam al-dīn b. al-Birzālī mā ṣawwartu-hu)。サファル月の9日水曜日、Sājūr 川がアレppoの街に達した。総督のアミール Sayf al-dīn Arghūn とアミールたち、街の人々が、徒歩で (mushātan) それを迎えに (talaqqī-hi) 出かけた。彼らの旗は、神の偉大さ (al-takbīr)、神の唯一性 (al-tahlīl)、神の恩寵 (ḥamd Allāh ta'ālā) を記したものだった。総督は、歌い手たち (al-mughannīn) や楽士たち (al-muṭribīn) の誰も従わせなかった。彼が帰還すると、混乱と病が彼を襲い (ḥaṣāla la-hu tashwīsh wa-maraḍ)、そして彼は亡くなった。(以下略)」

このように、両者の違いは細かな表現上のものとどまっており、伝える内容に大きな差は見られない。先述の通り【史料3-①】は、アイニーが「ヌワイリー曰く」と明示している情報である。それを、ジャザリーが「ビルザーリーの直筆稿」から引用したと述べていることは、何を意味するのだろうか。

ビルザーリー al-Birzālī (739/1339年没)⁽³²⁾ は、ジャザリーと同時代の歴史家であり、ジャザリーやイブン・カシールを含む、ダマスクスを中心に活動した多くの歴史家たちの情報源となっていた⁽³³⁾。ビルザーリーの著した年代記としては唯一、*al-Muqtafā* なる歴史書が現存するが⁽³⁴⁾、それがジャザリーらの引用する作品ではないことが、すでに明らかにされている⁽³⁵⁾。つまり、ジャザリーが「ビルザーリーの直筆稿」と呼ぶ歴史書は、すでに散逸してしまっているのである。

一方ヌワイリーにとっては、ジャザリーとビルザーリーの両者が、特にシリア地方での出来事についての重要な情報源であったことが知られている⁽³⁶⁾。したがって、【史料3-①】の記述のもととなったヌワイリーの記述も、*Ḥawādith* における【史料3-②】からか、あるいは「ビルザーリーの直筆稿」から直接引用されたものと考えられる。いずれにしても、【3-①】の記述がビルザーリーにまで遡りうるものであることは疑いがない。

以上、本節ではジャザリーの *Ḥawādith* がアイニーの記述に及ぼした影響にふれ、また散逸した「ビルザーリーの直筆稿」が直接、ないしは *Nihāya* を経てアイニーに伝えられているとの可能性を示した。

第4章 アイニーの執筆順序

以上の出典分析を踏まえ、ここではアイニーがどのような手順で彼の2年代記を執筆したかを検討する。

第1節 情報加工の流れ

まず *ʿIqd* には、Y情報とK情報の2つの大きな引用情報群が存在した。そしてアイニーの2著作において、Y情報が *ʿIqd* のみにしか見られない一方、ほとんどのK情報は *ʿIqd* と *Badr* で共有されていることを明らかにした。第1章で見たように、各写本の奥付情報はアイニーがまず *Badr* を執筆し、その後 *ʿIqd* を執筆したことを示しているが、このような執筆の順序は、*ʿIqd* と *Badr* のテキ

ストそのものを比較することによっても導き出される。ここで、これまでに見た【史料1】の記述を再び検討したい。

すでに第2章第2節で、*Iqd* と *Badr* のテキストを比較し、*Iqd* が王子の出発を726年シャアバーン月とし、アミールたちのカイロ帰還を「明くる年」すなわち727年のジュマダーⅡ月2日としているのに対し、*Badr* では出発を「その月 (al-shahr) の7日」とし、帰還については単にジュマダーⅡ月2日としていることを指摘した。このような食い違いは、仮に *Nihāya* を *Iqd*、*Badr* に先じるテキストとして措定することによって、次のように合理的な説明がつく。

すなわち、*Nihāya* では「ジュマダーⅠ月の6日」にスルターンが王子のカラク派遣を決意し、「その月 (al-shahr) の7日」に王子を出発させたとの記述がある。これが *Badr* の記述では、スルターンの決意の下りは省略され、「その月の7日」に王子を出発させたことから記述が始まる。そして *Iqd* では、「その月」という表現を受けて、何らかの理由からそれを「シャアバーン月」とであると判断した⁽³⁷⁾。そのため、元来 *Nihāya* ではジュマダーⅠ月（ヒジュラ暦第5月）に出発し、同年のジュマダーⅡ月（ヒジュラ暦第6月）に帰還したとされていた情報が、*Iqd* では本来の帰還月よりも時間的に下るシャアバーン月（ヒジュラ暦第8月）に出発するという矛盾が生じた。そこでアイニーは、*Iqd* では帰還月に「明くる年の」という文言を付け加え、この矛盾を解消しようとしたと考えられる。このような文章の変換は、*Nihāya* から引用された情報が *Badr* を経て、*Iqd* に至るという、アイニーの執筆手順を反映していると言える。

以上から、アイニーが *Badr* の後に *Iqd* を執筆したということが、テキストの内容においても明らかとなった。そして、アイニーの執筆手順を要約すると、以下のようになろう。すなわち、*Badr* 執筆の時点では、彼が「イブン・カシル」と呼ぶ史料からK情報を取り入れ、その後 *Iqd* を執筆する際に初めて *Nuzha* を利用してY情報を取り入れたのである。このようなアイニーによる史料参照

の仕方は、第2章第2節で見たような、Y情報とK情報を併置している箇所での両情報の扱い方に、特徴的に現れている。もちろん、この際に *Nuzha* のほかにも、*Ḥawādith* などの史料も利用して、叙述をより充実させることを意図していたことも確認できるのである⁽³⁸⁾。

第2節 アイニーの言う「イブン・カシール」について

それでは、K情報の情報源の問題について考察したい。

K情報については、アイニーが名指しで指定するイブン・カシールの現存する著作には、その引用元を求めることはできないことが明らかとなった。内容的にはむしろ、ヌワイリーの *Nihāya* の方がK情報の典拠としてはふさわしいが、その場合には *Nihāya* の途切れる730年以降においてもK情報が引用され続けている点で、問題が生じる。

これらの問題を解決するには、アイニーの言う「イブン・カシール」のテキストとして、現在にまで伝わっていない別の歴史書の存在を仮定せざるを得ないだろう。その歴史書とは、当該年代において *Bidāya* よりはるかに詳しい情報を伝え、*Nihāya* と非常に良く似た内容を有するはずである。

しかし、前節で見たK情報の変化の流れに注目するならば、アイニーは *ʿIqd* 執筆の際、K情報を *Badr* の記述から直接引用するのみで、それ以前の歴史書にまでさかのぼって参照することはなかった、と考えても良いだろう。もしそうであれば、*ʿIqd* において「イブン・カシール曰く」とある文言を、額面通りに受け取る必要はなくなる。なぜならアイニーが、*Badr* にある一部の記述を、機械的に「イブン・カシール」起源のものと見なしていた可能性が生じるからである⁽³⁹⁾。そのような仮定に立脚して、私はアイニーにおけるK情報の情報源を、散逸した「ビルザーリーの直筆稿」か、あるいはヌワイリーの *Nihāya* そのものであると推測する。むしろ、その両者ともがアイニーの情報源であったという可能性もあり得る。

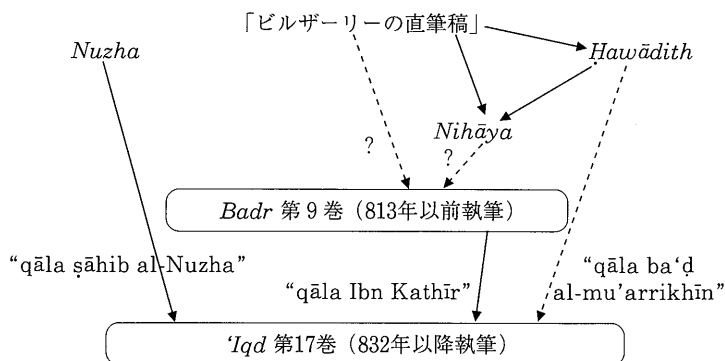
しかし直接の情報源が不明であっても、K情報の究極の情報源は、ビルザーリーにまで遡りうることは確かである。それゆえK情報は、Y情報と同様に、極めて高い史料的价值を有すると言えるのである。

お わ り に

本稿では、ヒジュラ暦725年から735年の記述を対象とし、*‘Iqd*と*Badr*というアイニーの2つの年代記が、どのような手順を経て執筆されたかを検討した。最後に、アイニーの史書編纂プロセスと、両年代記の史料的价值を検討して、本稿の締めくくりとしたい。

まずアイニーの史料編纂プロセスについてであるが、本稿が明らかにした諸史料の引用関係を図示すると、【図】のようになる。

【図】 *‘Iqd*、*Badr*に関する諸史料の引用関係



アイニーは最初に*Badr*という独立した年代記を著したが、その時期は遅くとも813/1410年を下らない。その後*Nuzha*という新たな情報源を得たアイニーが、*Badr*の記述を元にしつつもそれに大幅な加筆を行い、もう一つの年代記である*‘Iqd*を執筆した。*‘Iqd*第17巻の執筆は832/1428年以降と考えられるから、両年代記における当該年代執筆の間には20年近くの間隔があったことになる。

ここで、*Badr*と*‘Iqd*の叙述方法に注目すると、それぞれに異なる特徴があることが分かる。*Badr*の直接の典拠が*Nihāya*かそれに類する年代記であると仮定した上で、*Badr*の記述の特徴を見

るなら、アイニはそこでは元の記述をかなりの程度簡略化しているが、その一方で引用元についてはほとんど出典を記していない。一方 *Iqd* では、*Nuzha* および自らの年代記である *Badr* の記述をほぼ逐語的に引用しており、頻繁に出典を示している。このように、約20年を隔てて著された2著作は、その叙述方法に際だった差異が存在する。

次に、両年代記の史料価値を検討したい。*Iqd* のY情報は、失われた *Nuzha* に由来する情報を多く伝えているゆえに、非常に高い史料価値を有する。この場合の史料価値は、引用元であるユースフィーが有する同時代性に起因することは言うまでもない。たとえば、ユースフィー自身が従軍したヒジュラ暦725年のイエメン遠征については、実体験に基づく細かな情報を伝えているし、また728年の亡命アミール Tamurtāsh の逮捕・殺害については、その首級をイル・ハーン朝へ届ける使者となったアミール Aytamish からユースフィーが直接聞いた話を載せている⁽⁴⁰⁾。これらユースフィーによる一次情報を、アイニが他史料には見られないほどの正確さで伝えている点に、*Iqd* の重要性が認められる⁽⁴¹⁾。

一方、*Iqd* のK情報も、ビルザーリーの失われた情報を間接的に含む可能性があるために一定の価値を有するが、これに関しては *Badr* の方が *Iqd* を上回る量、あるいはより正確な記述を保持していることが確認できた。もっとも、K情報および *Badr* 中の情報はそのほとんどが *Nihāya* にも共有されているため、*Nihāya* が途絶える731年以降の記述を除いては、これらの史料価値は副次的なものに留まる。ただし、730年以前の記述においても、*Badr* 中には *Nihāya* には見られない独自の記述も見られるので、それらを見落とすことはできない⁽⁴²⁾。

しかし何よりも、複数の情報源からの情報を分類し、一つの出来事に関する記述を併記するという方法それ自体において、アイニの歴史家としての特質を見いだすことができる。【表2】では、出典明記のあるものに限ってそのような併記がなされている例を示したが、出典の明記されていない箇所での併記を含めれば、その例は

さらに多数に上る。文献学者 T. Khalidi は、マムルーク朝期に書かれた年代記がしばしば大部のものになるのは、歴史家の、様々な情報を収集し統制しようとする「百科事典的態度」を反映したものであると指摘するが、このような態度は *Iqd* において如実に見られるものであり、しかも *Badr* の執筆を経て洗練させられた特徴であると言ってよい⁽⁴³⁾。もっともこうした特徴は、本稿の対象年代のような、アイニーが間接的な情報しか持ち得ず必然的に他の諸史料に頼らざるを得なかった年代に関する記述において顕著であるものの、アイニーにとっての同時代に当たる年代についてはこの限りではない⁽⁴⁴⁾。

なお、*Iqd* はヒジュラ暦746年から798年にかけての記述（第18巻に相当）が欠落しているが、*Badr* が *Iqd* とは独立した作品であるなら、*Badr* はこの欠落部分を補う重要な史料たりうる。そうであれば、これまで史料の空白期と見られてきたバフリー期末期について、大きな貢献を果たすことになる。ただし、本稿が対象とした725-735年以外の各年代については、アイニーの情報源やそれによる史料的价值は必然的に異なるはずであり、さらなる史料研究が必要である。

註

- (1) アイニーに関する基本的な情報は以下を参照。C. Brockelmann, *Geschichte der arabischen Literatur*, II, 52-53; SII, 50-51; W. Marçais, "AL-'AYNĪ," *Encyclopaedia of Islam* (以下、EI2と略), new ed., vol. 1, pp. 790-791; *Iqd/Qarmūt*, vol. 1, 2-86 (史料の略称は後述)。
- (2) 中町信孝「バフリー・マムルーク朝時代史料としてのアイニーの年代記：ヒジュラ暦728年の記述を中心に」『オリエント』46:2 (2004), pp. 134-160。
- (3) それぞれ、*Iqd/Amīn*、*Iqd/Qarmūt* および *Iqd/Rizq*。また、*Al-Sulṭān Barqūq: Mu'assis Dawlat al-Mamālik al-Jarākisa*, ed. Īmān 'Umar Shukrī, Cairo, 2002は、バルクーク時代に相当する *Iqd*

の抜粋・校訂であるが、内容については検討を要する。

- (4) 中町「バフリー」p. 138の表1を参照のこと。
- (5) fols. 4, 9, 14, 19, 24, 29, 43, 48, 53, 58, 63, 68, 73, 78, 82, 83, 88, 89, 92, 94, 97.
- (6) 中町「バフリー」p. 141.
- (7) 中町「バフリー」p. 142の表5には、この写本の書写年は不明としてある。
- (8) Li Guo, *Early Mamluk Syrian Historiography: Al-Yūnīnī's Dhayl Mir' āt al-Zamān*, 1998, vol. 1, pp. 82-86によると、事件記事と死亡記事の2つの部分から構成される歴史書の体裁は、Ibn al-Jawzī (d. 597/1200) が初めて提示し、それを Sibṭ Ibn al-Jawzī (d. 654/1256) が、さらに al-Yūnīnī (d. 726/1326)、ジャザリー al-Jazarī (後述)、ビルザーリー al-Birzālī (後述) からなる一派が発展させて、al-Dhahabī (d. 748/1347) が完成させたという。これらの歴史家は Ibn al-Jawzī を除き、いずれもシリア地方で活動した歴史家であり、しばしば「シリア学派」と総称されるが、主にエジプトで活動したアイニーがその流れを受け継いでいる点は興味深い。ただし、いわゆる「シリア学派」の問題については、伊藤隆郎「サハーウィーの参照した歴史関連文献」『西南アジア研究』47(1997), p. 32, 註(20)も参照せねばならない。
- (9) 中町「バフリー」pp. 148, 157-160. ただし、*Badr* においても事件の生じた順序から逸脱する記述も存在するが、それについては第3章第3節でふれる。
- (10) *Badr*, 28r (26v). 本章第4節でふれる。
- (11) 段落の分け方については、以下の方針で行った。(1) “dhikr...” (～の話) で始まる見出しの付された部分を大段落とする。(2) 大段落の中で、“min-hā” (それらの者の中で)、“fi-hā” (その年において) という文句で始まる部分を中段落とする。(3) さらにその中で、“wa-qāla...” (～曰く) のように情報の引用元が前の部分とは異なることを示す文句で始まる部分や、その他内容の上で独立した段落と考えられる部分を、小段落とする。ただし、このようにして得られた各段落は、長短様々なものであることに留意せねばならない。

- (12) D.P. Little, *An Introduction to Mamluk Historiography: An Analysis of Arabic Annalistic and Biographical Sources for the Reign of al-Malik an-Nāṣir Muḥammad ibn Qalā'ūn*, Wiesbaden, 1970, pp. 81-; idem, "The Recovery of a Lost Source for Baḥrī Mamlūk History: al-Yūsufī's *Nuzhat al-Nāṣir fī Sirat al-Malik al-Nāṣir*," *Journal of the American Oriental Society*, 94 (1974), p. 44.
- (13) 典拠が明示されていない部分にも、Y情報、K情報と見なしうる箇所は多い。これについては後述する。
- (14) たとえば、*'Iqd/Qarmūt*, i, 65を見よ。
- (15) 中町「バフリー」 pp. 148-149.
- (16) *'Iqd*, 14v (31v), 30v (73r), 61r (158v); *Badr*, 28r (26v).
- (17) 【表2】の6, 8, 9, 12, 14, 15, 17, 19では、引用の順序が逆になる。
- (18) ユースフイーの経歴については、Little, "Recovery," pp. 46-48を参照。
- (19) Little, "Recovery," p. 44.
- (20) *Nuzha*, p. 8.
- (21) 733年 : *'Iqd*, 72r-72v (190r-190v) = *Nuzha*, 113-115; *'Iqd*, 73r? (192v-193v) = *Nuzha*, 116-118; *'Iqd*, 74v-75r (195v-196r) = *Nuzha*, 163-167.
- 734年 : *'Iqd*, 81v-82r (212v-214r) = *Nuzha*, 171-175; *'Iqd*, 82r? (214r-214v) = *Nuzha*, 175; *'Iqd*, ? (214v-215r) = *Nuzha*, 191-192; *'Iqd*, ? (217v) = *Nuzha*, 231; *'Iqd*, 84r-84v (220r-221r) = *Nuzha*, 201-203; *'Iqd*, 84v-85r (221r-222v) = *Nuzha*, 203-207; *'Iqd*, 86v-87r (226v-227r) = *Nuzha*, 183-185.
- 735年 : *'Iqd*, 90r (236r-236v) = *Nuzha*, 235; *'Iqd*, 90v (237r-237v) = *Nuzha*, 254-255; *'Iqd*, 91v-92r? (240v-241r) = *Nuzha*, 240; *'Iqd*, ?-93v (241v-244v) = *Nuzha*, 242-; *'Iqd*, 93v-94r? (235r-235v) = *Nuzha*, 232-234; *'Iqd*, 95r (248v) = *Nuzha*, 267-268.
- (22) 733年 : *'Iqd*, 72v (190v-191r) = *Nuzha*, 118-119; *'Iqd*, 72v (191v) = *Nuzha*, 123-125; *'Iqd*, 73r (192r-192v) = *Nuzha*, 131; *'Iqd*, 74r

(194r-195r) = *Nuzha*, 119-122, 127-128; *Iqd*, 74r-74v (195r-195v) = *Nuzha*, 163.

734年: *Iqd*, 81r (212r-212v) = *Nuzha*, 170-171; *Iqd*, 8? (215r-217r) = *Nuzha*, 194-198; *Iqd*, ? (218r) = *Nuzha*, 190-191, *Iqd*, ?-84r (218r-220r) = *Nuzha*, 198-201; *Iqd*, 85r-86r (222v-224v) = *Nuzha*, 207-210; *Iqd*, 86r-87r (225r-226v) = *Nuzha*, 177-183; *Iqd*, 87r (227r-227v) = *Nuzha*, 176-177.

735年: 89v-90r (235v-236r) = *Nuzha*, 235; *Iqd*, 90r-90v (236v-237r) = *Nuzha*, 254; *Iqd*, 90v (237v-238r) = *Nuzha*, 257-258; *Iqd*, 91r-91v (238v-240v) = *Nuzha*, 236-240; *Iqd*, 94r (246r-246v) = *Nuzha*, 229-231; *Iqd*, 94r (246v) = *Nuzha*, 240-241; *Iqd*, 94r (246v-248r) = *Nuzha*, 264-265; *Iqd*, 94? (248r-248v) = *Nuzha*, 265-267; *Iqd*, 95v (250r-251r) = *Nuzha*, 269-271.

(23) イブン・カシールの経歴については、以下を参照。H. Laoust, "IBN KATHĪR," *EI2*, vol. 3, pp. 817-818; idem, "Ibn Kaṭīr Historien," *Arabica*, 2 (1955), pp. 42-88.

(24) 本稿の対象年代から外れるが、*Iqd* 中のK情報の引用元が *Bidāya* には見られないということについては、中町信孝「批評と紹介: A.D. スチュアート『アルメニア王国とマムルーク: ヘトゥム 2 世統治下の戦争と外交』」『東洋学報』85:2 (2003), p. 07註(7)を参照。また、*Amīn* による校訂本の中でもこのことはたびたび指摘されている。たとえば、*Iqd/Amīn*, vol.4, 148, 193, 207, 297, 304, 369, 375, 378, 380, 384, 427 (以上、該当記事が *Bidāya* 刊本に見られないもの), 130, 184, 244, 286, 300, 319, 365, 369 (以上、該当記事が *Bidāya* では要約か部分的にしか見られないもの)。

(25) Laoust, "Ibn Kaṭīr," p. 67.

(26) ヌワイリーの経歴、および *Nihāya* の内容や執筆年代については、M. Chapoutot-Remadi, "AL-NUWAYRĪ," *EI2*, vol. 8, pp. 156-160 参照。

(27) *Nihāya*, xxxiii, 320. なおこの記述は、この刊本の底本とされている Dār al-Kutub, ma'ārif 'āmma, 549、すなわち Bibliothèque

Nationale de France, Arabe 5050写本から採られている。

- (28) *Nihāya*, xxxiii, 5.
- (29) *Nihāya*, xxxiii, 263. なお、本稿が対象とする年代の *Nihāya* の記述においては、ダマスクスでの事件がまとめて事件記事の最後に掲載される傾向がほぼ一貫して確認できる。*Nihāya*, xxxiii, 210, 240, 263, 285, 311の各見出しを参照。
- (30) 特に【表3】に明らかなおと、*Badr* の情報はそのほとんどが *Nihāya* に含まれており、*Badr* が *Nihāya* の抜粋であるかのようにも見える。ただし後述するとおり、*Badr* には *Nihāya* には見られない情報も含まれている。註(42)参照。
- (31) ジャザリーの経歴については A.S. Bazmee Ansar, “AL-DJAZARĪ,” *EI2*, vol. 2, pp. 522-523および *Ḥawādith*, ii, 18-41を参照。
- (32) ビルザーリーの経歴等は、F. Rosenthal, “AL-BIRZĀLĪ,” *EI2*, vol. 1, pp. 1238-1239を参照。
- (33) Guo, *Early Mamluk*, pp. 75-80.
- (34) *al-Muqtafā li-ta’rikh al-Shaykh Shihāb al-dīn Abī Shāma*, Topkapısarayı Müzesi Kütüphanesi, Ahmet III 2951.
- (35) Guo, *Early Mamluk*, p. 85.
- (36) Little, *An Introduction*, pp. 24-32, 96; S.M. Elham, *Kitbugā und Lāgīn: Studien zu Mamluken-Geschichte nach Baibars al-Manṣūrī und an-Nuwairī*, Freiburg, 1977, pp. 60-65.
- (37) 原則として事件の生起順に記述がなされている *Badr* においては、単に「その月」とある場合は、その直前の段落で記述されている事件と同じ月の出来事であると判断しうる。*Badr* の【史料1-②】で引用した記述の直前には、726年ジュマードーⅠ月にカイロから出発し、同年シャアバーン月に帰還した使者の記述がある。*Badr* では使者の出発月であるジュマードーⅠ月を「その月」と表現したが、*ʿIqd* ではそれを帰還月であるシャアバーン月のことであると解釈したために、このような変更が生じたと推測できる。
- (38) なお *ʿIqd* には、典拠の明記されていない段落で *ʿIqd* にしか見られない段落が262件あるが、第2章第1節で見たとおり、それらの多くは

Nuzha からの引用であると考えられ、それ以外の史料から採られた記述は少数である。

- (39) ただし、それではなぜアイニーはイブン・カシールを自らの情報源と見なしていたのかという疑問は残る。Laoust, “Ibn Kaṭīr,” p.83を引くまでもなく、*Bidāya* の後代の歴史家への影響は大きく、それゆえアイニーの時代にイブン・カシールは権威ある歴史家として見なされていたと考えてよいだろう。特に、イブン・カシールが、註(8)で挙げたいわゆる「シリア学派」に連なる歴史家であり、アイニーがその学派から影響を受けていた点を考え合わせれば、アイニーにとって彼と彼の学派がことのほか大きな権威と見なされていた可能性もある。また、実際にアイニーは、イブン・カシールが書写・校閲・加筆など何らかの形で制作に関わった写本を、イブン・カシール自身の著作としてとらえていたのかも知れない。「シリア学派」のチームワークとも呼びうる歴史書作成の実例については、Guo, *Early Mamluk*, pp. 81-82参照。

- (40) いずれも【表2】参照。

- (41) アイニーと同様に *Nuzha* から多くの情報を引用する歴史書としては、al-Maqrīzī (d. 845/1442) の *Kitāb al-sulūk* が知られているが、al-Maqrīzīは引用情報の要約や言い換えを頻繁に行っているため、より正確な引用を留めている *ʿIqd* の方が一次史料としての重要性が高いということが、すでに指摘されている。D.P. Little, “An Analysis of the Relationship between Four Mamluk Chronicles for 737-45,” *Journal of Semitic Studies*, 19 (1974), pp. 259-264参照。この論文が対象とする年代はヒジュラ暦737年以降であるが、導き出された結論は本稿の対象年代にも適用しうるだろう。

- (42) たとえば728年アレキサンドリアの牢獄から数名のアミールが釈放された話 (*Badr*, 21v (20v))、730年ヒジャーズへの遠征軍がダマスクスに帰還した記事、およびアミール Rumaytha b. Abī Numayy がメッカ支配者として赴任した記事 (*Badr*, 27v (26r))。

- (43) T. Khalidi, *Arabic Historical Thought in the Classical Period*, Cambridge, 1994, pp. 183-184. アイニーの「百科事典的態度」については、K. Hirschler も *ʿIqd/Rizq* についての書評論文 (*Mamlūk*

Studies Review, 8:2 (2004), pp. 216-217) で指摘している。なお、Khalidi がマムルーク朝年代記の「政治指向 (siyasa-oriented)」を重視するのに対し、Guo は、いわゆる「シリア学派」の発展させた「文学化 (adabization)」傾向に注目する (Guo, *Early Mamluk*, p. 81-96)。アイニーにおける「文学」的性質については、本稿で割愛した死亡記事の分析と併せ、別の機会に考察したい。

- (44) アイニーの同時代記述の特徴についてはとりあえず、D.P. Little, "A Comparison of al-Maqrīzī and al-'Aynī as Historians of Contemporary Events," *Mamlūk Studies Review*, 7:2 (2003), pp. 205-215.

【付記】 本研究は、財団法人平和中島財団2000年度日本人留学生奨学生としてエジプトに滞在した間に行った史料調査の成果の一部である。ここに記して謝意を表したい。